

## 特別講演Ⅱ

座長：堀江 重郎（順天堂大学）

### 最大限の効果を引き出す漢方治療

慶應義塾大学医学部漢方医学センター

渡辺 賢治

わが国は西洋医学の資格を有する医師が漢方を自在に処方できる、という特長がある。西洋医学で行き詰った時に、漢方というオプションがあることは、臨床医にも患者にもメリットが大きい。

臨床医の多くは病名に対応する漢方薬を選択することから始まると思う。それで効果が挙がることも多いが、効果がなかった場合に、一歩踏み込んで漢方の特質をとらえて治療を考えることで、解決策が見いだせることもある。

漢方の本質を一言で表すとすれば「病気を有する人を診る」ということである。医の原点はすべてここにあるので、何も特殊なことではないが、それを漢方的視点で捉えるのである。病態把握に問診が重要なことは言うまでもないが、初診時に有する症状を全般的に把握するシステムレビューは漢方の証を決定する上で重要である。しかしながら、処方決定にはそれだけでは十分でない。システムレビューには時間的な経過が欠如しており、時系列をさかのぼって種々のエピソードを聞くことが肝要となる。

腹痛で受診した患者さんはよく聞くと、海外出張した後に腹痛が出現するという。腹診で腹部動悸を触知し、腸管蠕動運動でなく、大動脈の動悸を痛みとして感じていたことが分かった。また、顔が火照って仕方がない、という患者さんは、冬でもアイスコーヒーを多飲し、氷もかじるという。そうすると余計に顔が火照る。この患者さんの顔の火照りの本質は極度の冷え症であった。これらは出現している愁訴(表現形)で漢方処方を決定していたらまったく的外れの治療になったであろう。痼疾(頑固な症状)にはさまざまな要因が絡んでおり、時に仕事のストレス、家族のトラブルなど、社会的な要因が絡んでいることも多い。

漢方は医師-患者の信頼関係を何よりも重視する。初診に時間をかけてしっかりと信頼関係が築ければ2回目以降の診察は短時間で済むことが多い。

病態が把握できたら次は処方選択である。最初から迷わずに処方を決める場合もあるが、複数の選択肢の中で迷うこともある。『傷寒論』では、確信を持ってこの処方でのよい、という場合には「主る(つかさどる)」と表現される。この処方でのよいであろう、という場合には「宜し(よろし)」と表現される。おそらくこの処方でもいいが、薬に対する反応を見ようという場合には「与う(あたう)」と表現される。漢方は実践の医学である。最初からクリーンヒットを飛ばそうと力まなくてもよい。薬に対する患者の反応を診ながら調整すればよいのである。

当日は、明日からの臨床に役立つ「最大限の効果を引き出す漢方治療」について多少なりともお役に立てる話ができれば幸いである。